

明治庶民にとっての 大行楽地

番目、 多さに資本家の立川勇次郎が着目したこと 時代にさかのぼり、古くから庶民の信仰を集 立し、明治32(1899)年1月21日に川 から川崎大師まで歩いて参拝する人たちの 通常の渡し船に加えて豪華な早船も出た。 社と併せて参拝する者が増え、祭の時には 田空港のところに鎮座していた穴守稲荷神 めていた。明治以降は多摩川対岸の今の羽 崎駅近くの六郷橋駅から大師駅 に始まるという。立川は大師電気鉄道を設 名を連ねている川崎大師。その創建は平安 大師駅)までの路線を開業した。 日本で3 京浜急行の歴史は、東海道本線の川崎駅 毎年、初詣参拝者数ランキングで上位 関東では初の電気鉄道であった。 (現・川崎

1月21日という開業日は川崎大師の縁日

明治3(1901)年には大森まで延伸さ れ、さらにはその翌年に蒲田駅(現・京急 て穴守稲荷神社へも鉄道で参拝できるよう 浦田駅)-穴守駅を開業した。これによっ 同年4月に社名を京浜電気鉄道に変更。 京浜電気鉄道は鉄道と渡し船を使った川





川崎大師門前の仲見世通。 土産物屋が軒を並べる

穴守稲荷神社

左/川崎大師創建 850 年を記念して昭和 52(1977)年に建てられた大山門。ここをくぐると厄除弘法大師像を安置する大本 堂の前に出る。この像は無実の罪で国を追われこの地に住んでいた平間兼乗が海より引き上げた霊像とされる。右/川崎大師駅 前に立つ「京急発祥之地」碑。昭和 43 (1968) 年に創立 70 周年を記念して作られた。車輪を表したモニュメントが載っている。





人々の憩いの場所ともなっている川崎大師境内。左は 昭和59 (1984) 年に建てられた八角五重塔。右奥は 大山門が建てられるまで山門として使われていた不動

京急蒲田 空港線 東京国際空港 京急川崎 川崎大師 小島新田 至横浜



/拝殿。穴守稲荷神社 は19世紀の初めに羽田 の堤防を守るために稲荷 社を祀ったのが始まりと される。かつての参道は 茶店などに加え鉱泉場や 遊園地まであり、大いに 賑わっていたという。 左/境内を守る神使の狐。 脚の間から顔を見せる子 狐がかわいい。

京浜工業地帯

門。総欅造りの二重門。

京浜急行電鉄株式会社

Keikyu Corporation

大師電気鉄道株式会社/明治31 (1898) 年 創 業

大師線 京急川崎-小島新田(4.5km)

穴守線も

は返還さ

空港線 京急蒲田-羽田空港国内線ターミナル (6.5km)

営業休止に追い込まれた。

は現在の場所に遷座し、

穴守線も一

部

https://www.keikyu.co.jp/



横浜を中心に広がる京浜工業地帯は日本の近代化の牽引役を果た 今も日本の産業の基盤となっている。この京浜工業地帯も大師線が 敷設されなかったら存在しなかったかもしれない。

となって京浜地帯に工場が集まるようにな

やがて京浜工業地帯へと発展すること

成・分譲を進めていった。

これがきっ

か

の余剰電力を販売するために沿

線の造

その後、京浜電気鉄道は自前の火力発電

になる。

市開発と京急

\(\begin{aligned}
1948\)

さらに三浦半島の観光開発、

品川

など

となっていった。 空港線と名前を変え、 昭 和 33 日本の玄関口 (1958) へと変貌した。 再び京急の看板路線 年に飛行場

かすかに聞こえるような気もする がひっそりと立っている。 たタイルが鉄道ファンには嬉し 祝って昭和43 関東初の電車に興奮した見物人の歓声 川崎大師駅前の一 碑の手前に敷かれたレールを模 (1 9 6 8) 画に「京急発祥之地碑 年に設置され 創立70周年を

退去が命じられた。 軍に接収されることとなり、 線には波乱の運命が待ち構えてい を含む羽田周辺の住民に対 拡大していったが、 社名を京浜急行電鉄に変更した) ての性格を維持し続けた。 昭 和 20 $\begin{pmatrix} 1 & 9 & 4 & 5 \\ 4 & 5 & 5 \end{pmatrix}$ (昭和 23 これにより穴守稲荷神 大師線は参詣路線とし 年、 羽田飛行場は米 いっぽう、 48時間以内の 穴守稲荷神社 の事業は 年に

業者・小林一三もこの回遊を体験し、 したと伝えられている。 回遊券なども発売した。阪急電鉄の創 感心

しぶやのぶひろ

1960年、東京生まれ。 早稲田大学第一文学部卒。日本宗教史研究家。『総図解 よくわかる 日本の神社』(KADOKAWA)、『諸国神社 一宮・二宮・三宮』(山川出版社)、『歴史さんぽ 東京の神社・お寺めぐり』『神々だけに許された地 秘境神社めぐり』『聖地鉄道めぐり』(以上、G.B.)、『眠れなくなるほど面白い 図解 仏教』(日本文芸社)ほか著書多数。